

# 令和6年度農作物病害虫発生予察情報

## 発生予報 第2号（5月予報）

発表日：令和6年4月26日

岩手県病害虫防除所

### 1 情報の要点

#### (1) 水稻

ア 育苗期の細菌病類はやや多の予報です。緑化～硬化期の適正な温度・水管理に努めましょう。

#### (2) 麦

ア 赤かび病はやや多、発生時期は早い予報です。赤かび病防除はすべての品種で適期に2回以上行いましょう。具体的には、開花始期（開花を始めた時期）～開花期に1回目の防除を、その7～10日後に2回目の防除を実施しましょう。

#### (3) りんご

ア 腐らん病はやや多の予報です。園地をよく見回り、病患部の早期発見、早期処置に努めましょう。  
イ ハマキムシ類は多の予報です。落花期に効果のある薬剤で防除を行いましょう。

### 2 農薬の安全使用

- (1) 農薬の使用にあたっては、他作物や周辺環境に影響が及ばないように十分配慮し、対策を講じましょう。
- (2) 水稻等で箱施用剤を使用する場合には、後作に影響のない場所で使用するか、ハウス内では無孔のビニールシートを使用する等、農薬が土壌に残留しないよう対策を徹底しましょう。

#### 【利用上の注意】

本資料は、令和6年4月24日現在の農薬登録情報に基づいて作成しています。

- ・ 農薬は、使用前に必ずラベルを確認し、使用者が責任を持って使用しましょう。
- ・ 農薬使用の際は（1）使用基準の遵守 （2）飛散防止 （3）防除実績の記帳を徹底しましょう。

【情報のお問い合わせは病害虫防除所まで】 TEL 0197(68)4427 FAX 0197(68)4316

☆この情報は、いわてアグリベンチャーネットでもご覧いただけます。

<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/boujo/index.html>



### 3 3ヶ月予報（5月～7月、4月23日発表）

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

5月 天気は数日の周期で変わるでしょう。

6月 期間の前半は、天気は数日の周期で変わるでしょう。期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

7月 平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。



図は気象庁ウェブサイト (<https://www.jma.go.jp/jma/index.html>) より引用

水稲病害

1 予報（5月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
細菌病類 (もみ枯細菌病) (苗立枯細菌病)	(育苗期)	やや多	(1) 育苗施設の巡回調査 (4/22～24) では、一部の施設で発生が確認された。(+) (2) 効果のある種子消毒剤が広域で使用されている。(－) (3) 5月の気温は、平年より高い予報。(＋)
苗立枯病 (ムレ苗含む)	(育苗期)	やや少	(1) 育苗施設の巡回調査 (4/22～24) では、例年並に発生量は少なかった。(±) (2) 5月の気温は、平年より高い予報。(－)
ばか苗病	(育苗期)	並	(1) 前年の本田での発生量は、平年よりやや少なかった。(－) (2) 育苗施設の巡回調査 (4/22～24) では、発生程度は低かった。(－) (3) 効果の不安定な種子消毒剤が広域で使用されている。(＋)
いもち病	(育苗期)	並	(1) 前年の穂いもちの発生量は、平年よりやや少なかった。(－) (2) 効果の不安定な種子消毒剤が広域で使用されている。(＋)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【共通事項】

- (1) 育苗期は適切な温度・水管理を心がける。
- (2) プール育苗の場合、湛水深は第2葉が出始めたら培土表面より上となるよう管理する。中途半端な湛水管理は病害発生の原因となるので注意する。

【細菌病類】

○4月10日発表 農作物病虫害防除速報 No.1を参照し、以下の対策をとる。

- (1) 緑化～硬化期の高温（ハウス温度 25℃以上）は発病を助長するので、適正な温度管理（ハウス温度日中 20～25℃）に努める。
- (2) 朝、外気温が低くても日射によりハウス内の温度は急激に上昇している場合があるので、ハウス内の温度や被覆資材内の温度をチェックするとともに、早めに開放する。
- (3) 発病苗はすぐに処分し、本田に移植しない。

【苗立枯病】

- (1) 乾燥や多湿が繰り返されると発病が助長されるので、乾かしすぎや過かん水、プール育苗における不完全な湛水管理を避ける。
- (2) ピシウム属菌、フザリウム属菌による苗立枯病は、低温で発病が助長されるので、霜注意報発令時等の低温の恐れがある時は、夜間のハウス内の保温に努める。

<病原菌別の発生要因>

病原菌	発生要因
リゾプス属菌	①床土や育苗施設、資材の汚染、②出芽時の高温（32℃以上）、③緑化、硬化時の低温（10℃以下）、④傷もみ、玄米の混入、⑤過湿、窒素過多、高密度播種
トリコデルマ属菌	①床土や育苗施設、資材の汚染、②保水力の小さい乾きやすい床土、③pHが4.0より低い土壌、④乾燥、過湿の繰り返し
フザリウム属菌	①緑化、硬化期間中の低温（10℃以下）、②乾燥、過湿の繰り返し、③過かん水と過湿（プール育苗での低水位も該当）
ピシウム属菌 (ムレ苗)	①低温（4℃以下）、②pHが5.5より高い土壌、③川や池の水を使用、④過かん水と過湿（プール育苗での低水位も該当）

### 【ばか苗病】

- (1) 稲わら・籾殻等は伝染源になるので、作業室や育苗施設及びその周辺に置かない。
- (2) 育苗箱内のばか苗病発病株は見つけ次第抜き取り、焼却するか土中に埋めて本田に持ち込まない。

### 【いもち病】

- (1) 覆土を丁寧に行い、籾を露出させない。かん水等で籾が露出しないように注意する。
- (2) 稲わら・籾殻等はいもち病の伝染源になるので、育苗施設内やその周辺に放置しない。
- (3) 防除を実施する場合は、育苗期間中に適用のある有効な薬剤を選択する。
- (4) 移植が遅れる場合、育苗期間中に発病する可能性があるので注意する。

## 3 防除上の留意事項

- (1) 箱施用剤を使用する場合には、後作に影響のない場所で使用するか、ハウス内では無孔のビニールシートを使用する等、農薬が土壌に残留しないよう対策を徹底する。
- (2) 箱施用剤は**使用基準（使用時期、1箱当り処理量）を遵守する**とともに、育苗箱に均一に処理する。  
また、高密度播種苗による移植栽培では、従来の予防粒剤の育苗箱施用では葉いもちに対して十分な効果が得られない場合があるので、10aあたり基準量の範囲内で箱当たり施用量を調整できる剤を使用する。
- (3) 育苗期防除を実施する際は、生物農薬と併用できない薬剤があるので注意すること。

## 水稻虫害

### 1 予報（5月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
イネミズゾウムシ	本田侵入盛期早	やや多	(1) 有効積算温度による本田侵入盛期は、平年より早い5月第6半月頃と予測される。 (2) 前年の発生量は平年よりやや多かったため、越冬量は平年よりやや多いと考えられる。(＋)
イネドロオイムシ	産卵盛期早	並 (平年少発生)	(1) 4月の気温は概ね高温で経過した。 (2) 前年の発生量は平年並に少なかったため、越冬量も平年並に少ないと考えられる。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(-)：少発要因、(- -)：重要な少発要因

### 2 防除のポイント

#### 【イネミズゾウムシ、イネドロオイムシ】

- (1) 両害虫ともに、前年箱施用剤による一斉防除を行った地域、および前年少発生の地域では、防除は不要である。
- (2) 前年に多発した圃場では、移植時に箱施用剤による防除を行うか、イネミズゾウムシでは成虫侵入盛期、イネドロオイムシでは産卵盛期に発生状況を調査し、防除要否を判断する（表1）。
- (3) 薬剤防除を実施しない場合は、前述の時期に同様の調査を行い、翌年の防除要否を判断する（表1）。

表1 イネミズゾウムシ、イネドロオイムシの防除要否判定基準（平年の場合）

病害虫名	判定および防除時期	判定方法	当年の要防除水準	翌年の要防除水準
イネミズゾウムシ	成虫本田侵入盛期	畦畔から2m程の場所から水田中心に向かって連続25株調査（水面下の株元まで見る）	成虫数	成虫数
	県中、南部：5月下旬～6月上旬 県北、山間部：6月中旬		8頭以上/25株	3頭以上/25株
イネドロオイムシ	産卵盛期	連続25株調査（水面下の株元まで見る）	卵塊数	卵塊数
	県中、南部：6月上旬 県北、山間部：6月中旬		13卵塊以上/25株	3卵塊以上/25株

#### 【斑点米カメムシ類】

- (1) アカスジカスミカメ越冬世代幼虫のふ化盛期に合わせて、地域一斉に増殖場所である水田畦畔、水田周辺の牧草地、雑草地、農道の草刈りを行う。なお、ふ化盛期は気象経過により変動するため、農作物病害虫防除速報（5月中旬頃発表予定）を参考にすること。
- (2) その後もイネ科植物が出穂しないような管理を心がける。

麦

### 1 予報（5月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
うどんこ病	—	並 (平年少発生)	(1) 前年の発生量は平年並に少なかった。(±) (2) 耐病性の強い品種が、広く作付けされている。(—) (3) 5月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並の予報。(±)
赤かび病	早	やや多	(1) 開花期は平年より早くなる見込み(作況圃)。 (2) 前年の発生量は、平年よりやや多かった。(+) (3) 赤かび病抵抗性「やや弱」品種「ゆきちから」の作付けが多い。(+) (4) 5月の降水量はほぼ平年並の予報。(±)
赤さび病	—	並	(1) 前年の発生量は、平年並であった。(±) (2) 耐病性の強い品種が、広く作付けされている。(—) (3) 5月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並の予報。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(—)：少発要因、(—)：重要な少発要因

### 2 防除のポイント

#### 【うどんこ病】

- (1) 前年及び既に発生が見られた圃場では、防除を実施する。
- (2) 防除時期の目安は、穂ばらみ期及びその7～10日後である。

#### 【赤かび病】

小麦の開花期は、平年より早くなる見込みなので、圃場毎の生育状況を観察し、適期に薬剤防除を実施する。

- (1) 赤かび病菌は、開花した穂に感染するため、開花期の薬剤防除が最も効果的である。圃場毎に生育状況を把握・記録し、確実に開花期に防除する。
- (2) 令和4年産県産麦でDON基準値超過が発生したことを受け、再発防止を徹底するために、赤かび病防除は全ての品種で適期に2回以上行う。具体的には、開花始期(開花を始めた時期)～開花期に1回目の防除を、その7～10日後に2回目の防除を実施する。曇雨天が続く場合には、さらに7～10日後に追加防除(3回目)を実施する。なお、3回目防除を実施する場合には、農薬の収穫前日数に注意する。
- (3) 使用する農薬は、赤かび病に適用がある農薬のうち、赤かび粒発生抑制及びDON含有濃度を低減する効果が高い農薬を選択する。
- (4) 成熟する前で穂が緑色の時期は罹病穂を識別しやすいので、この時期に抜き穂を行い、赤かび粒の混入を回避する。
- (5) 刈り遅れにより降雨に当たると、赤かび病の進展やDONの産生を助長する原因となるため、**適期(子実水分30%以下)になり次第、速やかに収穫する**。赤かび病が発生した部分、雑草が繁茂した部分などは刈分けを行い、良質な小麦への混入を避ける。
- (6) 収穫後、適切な水分まで乾燥する間に、赤かび病菌が増殖し、DONが産生される可能性があるため、可能な限り速やかに乾燥機に張り込み、循環型乾燥機で目標子実水分12.5%まで乾燥する。また、粒厚選別と比重選別を併用し、被害粒を除去する。

#### 【赤さび病】

- (1) 前年及び既に発生が見られた圃場では、防除を実施する。
- (2) 防除適期は、発病が見られた時及びその7～10日後である。
- (3) 下葉からまん延するので、下葉にも十分薬液がつくように散布する。

### 3 防除上の留意事項

- (1) 同一薬剤の連用又は同系薬剤の連用は、耐性菌が生じる恐れがあるので、効果の高い薬剤を輪番で使用する。

## りんご病害

### 1 予報（5月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
黒星病	早	並	(1) りんごの生育は平年より早い。 (2) 前年秋期の発生園地率は平年よりやや高かった。(+) (3) 重点防除時期（花蕾着色期）に感染好適日は出現しなかった。(－) (4) 5月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の予報。(±)
モニリア病 (実ぐされ)	早	並 (平年少発生)	(1) りんごの生育は平年より早い。 (2) 前年の発生園地率は、平年並に少なかった。(±) (3) 4月の降水量は少なかった。(－)
赤星病	－	並 (平年少発生)	(1) 前年の発生園地率は、平年並に少なかった。(±)
うどんこ病	－	並 (平年少発生)	(1) 前年の発生園地率は、平年並に少なかった。(±)
斑点落葉病	－	並	(1) 5月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の予報。(±)
腐らん病	－	やや多	(1) 展葉期の巡回調査では、発生園地率は平年よりやや高かった (+)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

### 2 防除のポイント

#### 【共通事項】

- (1) 5～6月は多くの病害の重点防除時期であるため、降雨前の予防散布を心がけ、薬量不足による散布ムラや散布間隔が空きすぎないように注意する。

#### 【黒星病】

- (1) 本病を対象としたDMI剤及びSDHI剤の使用は、耐性菌出現を回避するため、開花直前までとする。  
(2) 苗木及び未結果樹は成木と同様に防除を徹底する。  
(3) 発病葉および発病果は、速やかに摘み取り園地外へ持ち出し、土中に埋没させる等して処分する。  
(4) 苗木を定植する際は、頂芽のりん片で越冬する可能性があるため、必ず頂部を切り返す。

#### 【モニリア病】

- (1) 葉ぐされ、実ぐされは早めに摘み取り処分する。

#### 【うどんこ病】

- (1) 前年多発園では、落花期にコナケシ顆粒水和剤を特別散布する。

#### 【褐斑病】

- (1) 褐斑病を重点対象とする場合は、表1を参考に薬剤を選択する。  
(2) 一次感染期の防除が特に重要である。  
(3) 発生の初期は園内の1～数本程度の発生なので、園内を歩きながらできるだけ多くの樹を観察する。部分的な黄変葉がみられたら、褐色の病斑内部に小黑点の分生子層の存在の有無を観察する。

表1 褐斑病を重点対象とした防除体系

防除時期	散布別	薬剤名（商品名）	防除対象
開花直前	定期	オンリーワンフロアブル	一次感染
落花期～ 落花20日後	定期	デランフロアブル ラビライト水和剤	
6月中・下旬	特別	ユニックス顆粒水和剤47	二次感染
7月上旬	定期	パスポート顆粒水和剤	
7月中旬	特別	トップジンM水和剤／ベンレート水和剤	
8月以降	特別	トップジンM水和剤／ベンレート水和剤	

### 【腐らん病】

- (1) 罹病枝は開花期頃が最も発見しやすいので、園地をよく見回り、病患部の早期発見、早期処置に努める。
- (2) 腐らん病は、発生樹に隣接する樹に翌年も発生する傾向があるので、発病歴のある樹及びその隣接樹は注意して観察する。
- (3) 枝腐らんや胴腐らんは見つけ次第、剪除や削り取りを行い、切り口や削り取り部に薬剤を塗布する。6月以降、病患部からの孢子飛散が多くなるので、遅くとも5月中には処置を完了する。また、剪除した枝や削り取った病患部は園地内に残さないよう処分を徹底する。

## りんご虫害

### 1 予報（5月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
ハマキムシ類	－	多	(1) 4月中旬の巡回調査での発生園地率は、平年より高かった。(＋)
リンゴハダニ	早	並	(1) 基準圃場（北上市成田）でのふ化時期は、平年よりやや早い。 (2) 3月下旬～4月上旬の巡回調査での越冬卵の寄生園地率は、平年よりやや低かった。(－) (3) 5月の気温は平年より高い予報。(＋)
ナミハダニ	－	並	(1) 4月中旬の巡回調査での発生園地率は、平年より低かった。(－) (2) 5月の気温は平年より高い予報。(＋)
果樹カメムシ類	－	少～並	(1) 簡易トラップによるクサギカメムシの越冬量は、盛岡市では例年より少なく(－)、金ヶ崎町では例年並(±)、一関市では例年より少なかった。(－)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

### 2 防除のポイント

#### 【ハマキムシ類】

- (1) 落花期にハマキムシ類、アブラムシ類等を対象に有機リン剤を用いる。
- (2) 訪花昆虫導入園では、それらに影響のないIGR剤やBT剤、ジアミド剤を用いる。

#### 【ハダニ類】

- (1) リンゴハダニの発生が多い園地では、落花期にサンマイト水和剤、ピラニカ水和剤、バロックフロアブルを用いる。なお、リンゴハダニ、ナミハダニの両方がみられた場合は、粘着くん水和剤またはアカリタッチ乳剤の2回散布（落花期、落花10日後）が有効である。
- (2) ナミハダニの発生が多い園地では、粘着くん水和剤またはアカリタッチ乳剤の2回散布を行う。

#### 【モモチョッキリゾウムシ】

- (1) 前年被害が目立った園地での落花期の防除薬剤は、効果の高い合成ピレスロイド剤を用いる。

#### 【果樹カメムシ類】

- (1) 越冬成虫の飛来は、落花期前後から見られることが多い。例年発生が見られる園地では、この時期以降特に注意して観察を行う。
- (2) 飛来観察は、果実が餌となる周辺部の樹木（サクラ、クワ、キリ等）や防風ネット等も併せて随時行う。
- (3) 大量の飛来が確認された場合は、ただちに効果の高い薬剤を特別散布する。
- (4) 園地への飛来状況や発生量の予測等について、今後発表する情報に注意する。

### 3 防除上の留意事項

- (1) 養蜂活動が行われている地域で殺虫剤を散布する場合は、養蜂家と協議の上、散布時期を事前に通知するなど、ミツバチへの危害防止に努める。
- (2) サンマイト水和剤は、マメコバチに対して影響があるので注意する。

ねぎ

1 予報（5月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
ネギコガ	やや早	並	(1) 特定圃場（北上市成田）における第1世代幼虫のふ化は、平年よりやや早く確認された。 (2) 5月の気温は高い予報。（+） (3) 前年秋期の発生量は、平年より少なかった。（-）

記号の説明 （++）：重要な多発要因、（+）：多発要因、（±）：並発要因、（-）：少発要因、（--）：重要な少発要因

2 防除のポイント

【ネギコガ】

- (1) 圃場の観察に努め、第1世代幼虫による加害が認められる場合には、有機リン剤等を散布する。
- (2) 有効積算温度から推察される第2世代の防除適期は、県中南部では6月第1半旬頃と推察されるが、気象条件により前後する可能性があるため、今後の発生予察情報等を参考にする。
- (3) 今後定植を予定しているところでは、定植時にジノテフラン水溶剤を、セルトレイまたはペーパーポットに灌注する。



図1 ネギコガ幼虫による食害痕（赤枠内）

# りんどう

## 1 予報（5月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
リンドウ ホソハマキ	やや早	やや少	(1) 5月の気温は高い予報で、有効積算温度から推測される羽化始期は 平年並。 (2) 前年秋期の発生量は、平年より少なかった。(一)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(-)：少発要因、(- -)：重要な少発要因

## 2 防除のポイント

### 【リンドウホソハマキ】

- (1) まだ残茎がみられる圃場では、越冬世代成虫発生時期（県中南部で平年5月下旬から）までに残茎処理を徹底する。処理の際はできるだけ地際に近い部分から折り取り、株元まで残さないようにする。また、集めた残茎を圃場内に放置すると発生源になるので、適切に処理する。
- (2) 重点防除対象は第1世代の卵・幼虫であり、成虫または潜葉痕および食害痕（図1、2）が認められたら薬剤を散布する。県中南部での防除適期は平年6月上旬であるが、防除開始時期は年によって変動が認められることから、今後の発生予察情報等を参考にする。
- (3) 前年、アディオフロアブルを散布しても被害が目立つ圃場では、ディアナSCまたはフェニックス顆粒水和剤を10日間隔で、2回散布して防除する（平成26年度試験研究成果、平成30年度防除技術情報参照）。
- (4) 産卵の大部分は葉裏に行われるので、下位葉の葉裏までしっかり薬剤がかかるよう、丁寧に散布する。
- (5) 茎部に食入後の幼虫は薬剤防除が難しいため、生長部が萎れて曲がる被害（図3）を見つけたら折り取り、土中に埋めるなどして処分する。



図1 潜葉痕



図2 生長部の食害痕



図3 生長部の被害